

白オクラ果実腐敗症

病原菌：*Pseudomonas cichorii*

○被害と発生生態

本症は、細菌によって起こる病気であり、白オクラの果実に発生する。発病初期には果実の先端が黒変し、内部に腐敗が発生する。腐敗の進行とともに果実先端から下の部分の表皮も艶を失い、やや黒ずむ。腐敗した果実先端からは菌泥が溢出することもあるが、悪臭はない。果実の腐敗は幼果の場合、急速に拡大し、果実全体が褐変・乾固する。

一般のオクラでは、本症の発生は確認されていない。

病原菌は、オクラ葉枯細菌病菌と同一である。葉の病徴は、不整形の水浸状病斑が発生し、後に、周縁が濃褐色で中央部が淡褐色の壊死斑が発生する。葉枯細菌病が発生した株では、果実腐敗症の発生も多い。

発症は、果実肥大期～収穫期の葉上の病斑が伝染源となり、降雨等により果実先端部へ飛沫伝染し発症すると考えられる。

○防除方法

葉枯細菌病の防除を徹底する。

花殻の放置は、発生を助長するため、適時除去する。

防除薬剤は、銅剤が有効である。炭酸カルシウム水和剤（商品名：クレフノン、400倍）を調整時に加用することで、薬害が軽減できる。



図1 樹上での被害果実



図2 被害果実の内部



図3 葉枯細菌病の被害葉